



Title	「学校年報」から見るドイツ中等学校の世界：19・20世紀ドイツ語圏におけるギムナジウムのネットワークに関する史料状況
Author(s)	進藤, 修一
Citation	Sprache und Kultur. 2023, 42, p. 33-42
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/90040">https://doi.org/10.18910/90040</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

## 「学校年報」から見るドイツ中等学校の世界

——19・20世紀ドイツ語圏における

ギムナジウムのネットワークに関する史料状況——

進藤修一

### はじめに

ドイツ教育社会史研究は1970年代から盛んに取り組み、80年代になると「学校の社会史」という形でさまざまな研究成果が出されるようになる。その一例はドイツ研究協会（DFG）による「教育制度における資格付与の危機と構造変動」というプロジェクトであり、ここから多くの研究成果が生み出された。このプロジェクト（1977-82年）は、数多くの歴史資料を用いて中等・高等教育における学生の社会的出自、宗教、年齢などを数値化し、これが計量的な研究に資するさまざまな教育データを収めた*Datenhandbuch der Deutschen Bildungsgeschichte*<sup>1)</sup>のシリーズとなり（1987年から刊行、現在まで続く）、また同年、15世紀から現代までのドイツ教育を概観する*Handbuch der Deutschen Bildungsgeschichte*シリーズの刊行も始まった。

我が国ではやや遅れて1980年代より19世紀の諸学校に関する研究が大きく発展したが、マルガレート・クラウルの“*Das Deutsche Gymnasium 1780-1980*”<sup>2)</sup>が『ドイツ・ギムナジウム200年史』<sup>3)</sup>として邦訳され、これが教育社会史研究の嚆矢とされる。ただしそれは、邦訳サブタイトル「エリート養成の社会史」が与えた「誤解」ともいえる。というのも同書では「本書ではギムナジウムという学校類型の発展が（中略）示される<sup>4)</sup>」（下線・中略、筆者）ということが明確に示されており、この研究は実は制度史の側面が強いのである。他方、クラウルは「ギムナジウムの学校生活や精神的雰囲気をも明らかにするために、ひとつのギムナジウムを選んだ<sup>5)</sup>」と述べ、東ヴェストファーレンの小都市、ミンデンにあるギムナジウムをケーススタディの対象としている。

このように、教育社会史の先駆的研究としてクラウルの業績は評価できる一方、なぜ地方の小都市ミンデンをとりあげ、プロイセンにおけるギムナジウムの学校現場の実態を解明する手掛かりとしたのか、という点については考える必要がある。まず、ドイツ中等教育史研究で自明のこととして語られている中等教育段階の学校システム＝三分岐型（9年制中等学校がギムナジウム、実科ギムナジウム、高等実科学校という異なった学校類型からなる＝複線型制度）とはあくまでもモデルケースであり、これが実際に見られたのは数少ない大都市に限定されたことだということがわかっている<sup>6)</sup>。ちなみに、その例外的な都市として挙げられるのがベルリンである。プロイセン王国の王都であり、1871年からはドイツ帝国の帝都となるベルリンは世紀転換期頃には16-18校のギムナジウムを有したが、同市の人口はドイツ帝国成立直後の1874年で949,111人<sup>7)</sup>、世紀転換期の1894年で約1,877,304人<sup>8)</sup>、1910年で2,062,065人である<sup>9)</sup>。1910年時点のドイツで人口10万人を超える都市が帝国内の全都市中わずか2割程度だったということを考慮すれば<sup>10)</sup>、大多数の生徒や保護者にとって、自らが居住する町や近隣に中等学校はせいぜい1校あるかないか、というのが現状だったであろう。クラウルがミンデンという小都市をケーススタディの対象としたのはそのためであろう。さらに、このように学校の選択肢が少ない中で、地方で大学進学を希望する子どもは、必然的に下宿、寄宿ということを想定せざるを得ないが、このような生徒がどれくらい規模であったのか、また、その際に進学先を決定していた情報はなんであったのか、これについてもやはり先行研究は全くあきらかにしていない。

望田幸男が編著書『国際比較 近代中等教育の構造と機能<sup>11)</sup>』において叙述したドイツの部分については、ベルリンのギムナジウムにおける生徒の階層移動がテーマであり、これはドイツにおける先駆的業績であるデートレフ・K・ミュラーの『社会構造と学校制度<sup>12)</sup>』の影響が濃い。ミュラーがいう「社会構造」とは生徒の社会的出自、すなわち社会階層のことであり、ここでは学校を介した生徒の階層間移動に関心が寄せられている。だが、それに加えて実際には生徒の地域的流動性がかなりあったと推定される。当時のドイツ大学生が複数の大学を渡り歩いたことは常識であるが、実は中等学校生徒も遠方の学校に通学することや、転校することがそれほど稀ではなかった。ただし、この問題点はこれまで指摘はされてきたものの<sup>13)</sup>、実証はされていない。この時代、全寮制ギムナジウムは各地に存在し、そのなかでもフィヒテなど数多くの著名人を輩出したプフォルタ

校 (Schulprofta) が有名である。あるいはエーリヒ・ケストナーの小説『飛ぶ教室』で舞台とされたヨハン・ジギスムント高等中学 (原語では Johann-Sigismund Gymnasium) も全寮制の設定である。また、寄宿学校でなくともギムナジウム生徒の中には下宿生がいた可能性はある。ヴェストファーレンの小都市にあるギムナジウムでは、在籍生の5割から8割が遠隔地出身の生徒だったという指摘もあるためだ<sup>14)</sup>。

これだけ生徒の中に地域間の流動性が見られる、ということはドイツ中等学校史研究でこれまで注目されてこなかったいくつかの問題を提示する。そのひとつに、中等学校間でどうやって教育の質保証がなされていたのかが解明されていないということがある。このころのギムナジウムでのカリキュラムは明らかにされており、どのような科目がどれだけの時間数行われたのかについてはわかっている。だが、授業の内容や教員の質などについての検討はなされていない。そこから逆説的に言えば、ギムナジウム生徒の地域的流動性 (出身地と学校所在地の違い) が高かったことで、カリキュラムや教員の再教育において、一定の質を担保する仕組みがあったのではないかという仮説が示される。とりわけ、ドイツや中欧地域は連邦主義的傾向が強いにもかかわらず、生徒が地域を超えて移動していたということがその根拠となる。現在のドイツでは学校に関する権限 (文化高権) が州に属する分権的しくみであるため、連邦内で一定の調整機能を有する。とすれば、19世紀においてもなんらかの形で同様の制度や機能が存在したのではないだろうか。

この疑問を解明する資料として、活用できるのが「学校年報」である。そこには各学校における教員の研究活動や、奨学金の情報、生徒の保護者と学校の関係、アビトゥーア (終了試験) の実施状況、試験問題、終了試験合格者など、さまざまな情報が掲載されている。そこで、本トピックスでは、ドイツの各ギムナジウムが発行していた学校年報 Schulprogramme の性格や仕組み、機能を概観し、ドイツにおける史料状況を紹介する。

## 1. 学校年報の概要

ドイツにおいてはいまでも「学校年報」Schulprogramme が発行されている。しかし現代のそれはいわゆる「学校案内」の性格を出ない。本論で扱う「学校年報」と

は16世紀からドイツ語圏の各中等学校で発行された年報であり、まったく異なる機能を有していた。その呼称はJahresberichte, Schulprogramme, Schulnachrichten, Schulschriften, Programmliteratur, Gelegenheitsschriftenなど、さまざまである。すでに述べたように学校年報の最古の例は16世紀にまで遡るが、18世紀になると広く普及し始めることになる。その頃の学校年報は教員が執筆する部分もあり、一卷あたり通例4-50頁ほどであった。教員がこの学校年報に関与することになった背景のひとつとして、プロイセンで1824年に定められたギムナジウム試験に関する規程が挙げられる<sup>15)</sup>。この規程でギムナジウム教員による研究の成果や学校の教授内容、修了試験(アビトゥーア)にかんする情報を年報の形で公刊することが義務づけられたのである(実際に義務化されたのは1825年から)。このようにして、学校年報はいわゆる「官報」として扱われるようになった。キルシュバウムはそのため「新しい形での学校年報の誕生日は1824年8月24日である<sup>16)</sup>」としている。1872年になると、学校年報への学術論文の掲載義務がなくなるが、その後、教員の学術論文は別冊(Beilage)として発行されることが多くなった。このように、「研究者」の側面を持つギムナジウム教師は、自身の研究を公開する場としてこの学校年報を用いていたようである。

次に、プロイセン以外の邦における学校年報の導入はいつごろだったのかについて見てみよう。学校年報の発行が義務化されたのは、バイエルンでは1825年、ザクセンで1833年、バーデンで1836年であることが分かっている<sup>17)</sup>。このように、ドイツの各邦で学校年報の発行が義務化されたことにより、邦を超え、ドイツ全土の学校間で学校年報を交換し、普及するきっかけが生まれた。1831年にはフランクフルト・アム・マイン、リューベックといったかつての帝国都市の学校もこの交換ネットワークに合流し、実際にリューベックの市立図書館にはいまでも約40,000冊の学校年報が保管されている<sup>18)</sup>。1836年になるとザクセン王国、ヘッセン大公国のギムナジウムがプロイセンの学校年報交換制度に参加した<sup>19)</sup>。1837年にバーデン大公国、ただし、この交換制度がより整備されるのは1871年のドイツ統一以後のことであり、なぜ、その時点で学校の交換が整備されたのかについては今のところ定かではない。

では、次にシステム化された学校年報の交換のしくみを概観してみよう。当初は内容や形式がばらばらだった学校年報であるが、そのフォーマットの共通化については1875年に決着をみた。そして、各学校に学校年報の提出義務が課され

ようになった。具体的には以下の通り学校間で学校年報が交換されるようになったのである。

1875年に整備された方法からは以下のプロセスが見て取れる。まず各学校で公刊予定の学校年報の目次が各県の学校局へ集められる。次に学校種別や所在地別に分類された目次が11月なかばにザクセン邦ライプツィヒ市にあるトイブナー出版社 Teubnersche Buchhandlung へ送致される。トイブナー社は各学校年報に番号を付したカタログを作成し、学校、図書館、大学、行政へと送付する。さらにトイブナー社は同年末までに各学校へ希望部数を問い合わせる。各校は学校年報を発行し次第、トイブナー社へ送付する。この規定では、将来的には、学校年報は全て同じフォーマットで印刷されることとする、と定められていた。

ちなみに、トイブナー社が各学校年報に付与した番号であるが、正式には「学校年報番号」Programmnummer というもので、これを管理したトイブナー社にちなんで、俗に「トイブナー番号 Teubnernummer」と呼ばれた。このような手順により、各学校年報に番号が振られ (Numerus Currens)、基本的には学校年報の表紙の左下にその番号が記されることとなった。このようにシステムティックに流通するようになった学校年報であるが、1882年には833の学校年報がトイブナー社のカタログに掲載されている。

このようにシステム化が進んだ学校年報であるが、トイブナー社のシステムを追うだけではわからないものがある、ハプスブルク帝国内のドイツ語系中等学校も1848年以降学校年報を発行していたが、これにはトイブナー番号がない。にもかかわらず学校年報の交換制度にはハプスブルク帝国内の68の中等学校が参加している<sup>20)</sup>(ドイツ北部ビーレフェルト市にあるラーツギムナジウム図書室には、ハプスブルク帝国やズデーテンラント (現在のチェコ) の学校が発行した年報が残っており、トイブナー社の管轄下でないこれらの中等学校も、学校年報交換システムに参加していたことの証拠となる)。

## 2. 学校年報のもつ研究上の意義

ここまで、学校年報とはどういうものであったのかを概観してきたが、次にこの出版物が持っていた社会的機能について検討してみよう。

まず、学校年報が一般の人間からどう見られていたのか。まずは、研究者とし

ての中等学校教員の声望を示すものとしての学校年報に注目してみよう。中世史家ヘルマン・ハインペル [1901-1988] は、その回想録で自らの若い頃を次のような例を挙げている。「学友エアハルト君が早速学校年報を買い求めた。彼はまだギリシア語が読めなかったので、内容についてはさっぱり理解できなかった。だが、彼は、ギムナジウムの教師が教養人であることを知った<sup>21)</sup>」。ギムナジウムの上級教師 (Oberlehrer) は教授 (Professor) に叙されるケースもあり、地域社会における知識人としての声望がどの程であったのか、この例から知ることができる。そして、学校年報が教師の研究をアウトリーチするメディアとなっていたことは興味深い事実である。

そして、学校年報の交換システムが確立されたことから、中等学校の間で情報網が構築されたことになる。すなわち、他校でどのような教員がおり、どのように授業や修了試験が実施されているかがわかるしくみが成立した。既に述べたように、各ギムナジウムの図書室をはじめドイツ各地の図書館等にはいまでも相当数の学校年報が所蔵されており、この交換ネットワークの規模を推測させる。

なお、これらの資料がもつ問題点や限界も指摘しておかなければならない。各ギムナジウム生徒の社会的出自がある程度把握できるが、学校によってデータにかなりのばらつきがある。また、基本的には修了生 (アビトゥーア取得者) のデータしか掲載されておらず、中途退学者についてはデータがない。

## おわりに——今後への展望

この学校記録は「官報」扱いとなっていたせいも、歴史研究の史料としては活用されてこなかった。そのため、まず図書館学分野の研究でこの資料の希少性が注目され、ドイツ教育社会史の新たな一面を照射する可能性が開かれた。さらには、一国史を超え、中央ヨーロッパのドイツ語圏に所在する学校を視野に入れた教育社会史の構築、という展望さえ開かれている。すなわち、この資料を活用することにより、既存の研究がカバーしていない以下の点を解明できよう。a) 研究上「ギムナジウム体制」と呼ばれている大学進学権の独占制度とそれによる社会階層の移動、という構造史的研究の盲点 (学校の実情、「隠されたカリキュラム」と呼ばれる学校内でのエートスの生成のメカニズム、など) を明らかにすること、b) 19世紀の中等学校の「質保証」を整備する仕組みに着目し、その制度と機

表「学校年報」所蔵状況 (Jakob<sup>22</sup>) から抜粋+筆者加筆)

所蔵機関	所蔵数	所蔵資料の情報
ライプツィヒ大学図書館	155,000	1780-1930年に発行されたもの
ゲレスギムナジウム教員図書室 (デュッセルドルフ)	140,000	1815-1914年に発行されたもの (1450校、880ヶ所)。
ドイツ教育史研究図書館 (ベルリン市)	70,000	18世紀～1940年までの学校年報 (プロイセン)。一部デジタル化
カッセル総合専門大学図書館	54,000	学校年報(カッセルの特別収集分 含む)
フンボルト大学図書館	52,000	1930年までの学校年報、750ヶ所
カール大帝ギムナジウム図書室 (アーヘン)	50,000	1811-1915年までのドイツ語圏の 学校年報
ギーセン大学図書館	50,000	1824-1918年の学校年報。「ケス ターカタログ」(ギーセン大学学 校年報コレクション)で整理され ている
ミュンスター大学・州立図書館	50,000	19世紀、20世紀初期の学校年報。 ドイツ語圏の1537校の年報。
アウグスト公図書館 (ヴォルフエンビュッテル)	50,000	ドイツ帝国(1870-1914年)の学校 年報、ヴォルフエンビュッテルと ブラウンシュヴァイクが中心。
テューリンゲン大学・州立図書館 (イエナ)	48,000	1876-1914年のもの(トイブナー 出版の交換システム開始以後)
ノルトライン=ヴェストファーレン州 立文書館図書室 (ミュンスター)	40,000	1824/37年以後のプロイセン、そ の他各邦の学校年報
ハンザ都市図書館 (リュエバック)	39,298	1830-1914、バルト海地域を 含む (ケーニヒスベルクなど)
プフォルタ校図書館 (パート・ケーゼン)	35,000	
ベルリン国立図書館	34,625	1850-1915、プロイセンに所在す る学校のもの
パイロイト大学図書館	32,000	17-20世紀の学校年報
ラーツギムナジウム図書室 (ビーレフェルト)	30,000	1825-1915年、ドイツ語圏全域(特 にはハプスブルク、東部ドイツ、 シュレージエン、ズデーテン地方)

能を明らかにすること、c) 中等学校生徒の学校間（地域間）移動の実態を解き明かし、ドイツ語圏に存在したであろう統一的な「中等学校システム」の存在を明らかにすること。これだけの研究の可能性を秘めた資料が大規模に、そして注目されていないまま保管されてきたことは驚きを隠しえない。

※本稿は科学研究費補助金（基盤研究C）「中央ヨーロッパ・ドイツ系中等学校の比較研究—国家・地域を越えたシステムの検討」（研究課題・領域番号16K03000）による成果の一部である。

## 参考文献

### 欧文一次文献

Bardt, C. *Jahresbericht über das Königl. Joachimsthalsche Gymnasium für das Schuljahr 1904*, Berlin 1905  
*Zentralblatt für die gesamte Unterrichtsverwaltung in Preußen*  
 Heidemann, Julius, *Geschichte des Grauen Klosters zu Berlin*, Berlin 1874.

### 欧文二次文献

Gräbe, Viktoria Luise, Zwischen Unterrichtsprinzip und Schulfach: Lebenskundlicher Unterricht im Volksschulwesen der Weimarer Republik. Zwei konzeptionelle Exempel, in: *Jahrbuch für Historische Bildungsforschung* 25, 2019.  
 Jakob, Hans-Joachim, Schulprogramme im 19. Jahrhundert. Anatomie einer Publikationsform, in: Korte, Hermann, Ilonka Zimmer, Hans-Joachim Jakob (Hrsg.), *»Die Wahl der Schriftsteller ist richtig zu leiten«*, Frankfurt am Main/ Berlin/ Bern/ Bruxelles/ New York /Oxford/ Wein 2005.  
 Kalok, Lothar, Schulprogramme. Eine fast vergessene Literaturgattung, in: Irmgard Hort, Peter Reuter (Hrsg.): *Aus mageren und aus ertragreichen Jahren*. Gießen 2007.  
 Kirschbaum, Markus, *Litteratura Gymnasii. Schulprogramme deutscher höherer Lehranstalten des 19. Jahrhunderts als Ausweis von Wissenschaftsstandort, Berufsstatus und gesellschaftspolitischer Prävention*, Koblenz 2007.  
 Kössler, Franz, *Verzeichnis von Programm-Abhandlungen deutscher, österreichischer und schweizerischer Schulen der Jahre 1825–1918*, München/ London/ New York/ Oxford/ Paris 1987.  
 Kregel, Rainer, Die Geschichte der Gymnasialbibliothek Minden, in: *Westfälische Zeitschrift* 139, 1989.  
 Lemanski, Thorsten, Irmgard Siebert, Rainer Weber, Erschließung und Digitalisierung von Schulprogrammen. Bericht über ein Projekt der Universitäts- und Landesbibliothek Düsseldorf, in: *Bibliotheksdienst* 45, 2011.  
 Nydahl, Jens (Hrsg.), *Das Berliner Schulwesen*, Berlin 1928.

- Scharf, Karl-Heinz, Bernd Nussinger, *Schulprogramme und Jahresberichte in Bayern Preußen im 19. Jahrhundert. Wer war zuerst aktiv? Eine Streitfrage*, 2013, urn:nbn:de:bvb:29-opus4-37954
- Schliebe, Georg, *Reifejahre im Internat. Das Chroniktagebuch einer Internatklasse aus den Jahren 1915-1922*, Leipzig 1934.
- Scholz, Harald, *Gymnasium zum Grauen Kloster 1874-1974*, Weinheim 1998.
- Ullrich, Richard, *Programmwesen und Programmbibliothek der höheren Schulen in Deutschland, Österreich und der Schweiz*, Berlin 1908.
- Verlder, Christian, Rolf Gehrmann, *Französisches Gymnasium Materialienband zur Festschrift 300 Jahre Französisches Gymnasium Berlin*, Berlin/Bonn 1989.

### 邦語文献

- 橋本伸也ほか、『エリート教育』ミネルヴァ書房、2001年。
- 望田幸男編、『国際比較 近代中等教育の構造と機能』名古屋大学出版会、1989年

### 註

- 1) 1987年にMüller, Detlev K, Bernd Zymek (Hrsg.), *Sozialgeschichte und Statistik des Schulsystems in den Staaten des Deutschen Reiches 1800-1945*, Titze, Hartmut (Hrsg.), *Das Hochschulstudium in Preußen und Deutschland 1820-1944*の2冊がVandenhoeck & Ruprecht社から発行された。このシリーズはその後も刊行が続き、Lundgreen, Peter, *Die Lehrer an den Schulen in der Bundesrepublik Deutschland*, Göttingen 2012まで12巻が跋行されている。
- 2) Margret Kraul, *Das Deutsche Gymnasium 1780-1980*, Frankfurt am Main 1984.
- 3) マルグレート・クラウル『ドイツ・ギムナジウム200年史』望田幸男監訳、ミネルヴァ書房、1986年。
- 4) Kraul, op. cit, S. i.
- 5) ibid, S. ii
- 6) 進藤修一「ドイツのエリート教育」、橋本伸也ほか『エリート教育』ミネルヴァ書房、2001年、所収。
- 8) *Adreßbuch für Berlin und seine Vororte 1875*, Statistik, [https://digital.zlb.de/viewer/image/3411551\\_2\\_1875/1852/LOG\\_0147/](https://digital.zlb.de/viewer/image/3411551_2_1875/1852/LOG_0147/)(abgerufen am 3. Nov. 2022)
- 8) *Adreßbuch für Berlin und seine Vororte 1895*, Statistik, [https://digital.zlb.de/viewer/image/3411551\\_2\\_1895/2933/LOG\\_0229/](https://digital.zlb.de/viewer/image/3411551_2_1895/2933/LOG_0229/)(abgerufen am 3. Nov. 2022).
- 9) *Statistisches Jahrbuch der Stadt Berlin*, Ausgabe 33, 1912/1914, [https://digital.zlb.de/viewer/image/16308258\\_1912\\_1914/24/](https://digital.zlb.de/viewer/image/16308258_1912_1914/24/)(abgerufen am 3. Nov. 2022)
- 10) Sautter, Udo, *Deutsche Geschichte seit 1815: Daten, Fakten, Dokumente. Band I: Daten und Fakten*, Tübingen/ Basel 2004, S. 34ff.
- 11) 望田幸男編『国際比較 近代中等教育の構造と機能』名古屋大学出版会、1990年。

- 12) Müller, Detlef K, *Sozialstruktur und Schulsystem*, Göttingen 1977
- 13) 進藤修一「ドイツのエリート教育」、橋本伸也ほか『エリート教育』ミネルヴァ書房、2001年、所収。
- 14) 進藤同上論文、127頁。
- 15) Gräbe, Viktoria Luise, Zwischen Unterrichtsprinzip und Schulfach: Lebenskundlicher Unterricht im Volksschulwesen der Weimarer Republik. Zwei konzeptionelle Exempel, in: *Jahrbuch für Historische Bildungsforschung* 25, 2019, S. 209.
- 16) Kirschbaum, Markus, *Litteratura Gymnasii. Schulprogramme deutscher höherer Lehranstalten des 19. Jahrhunderts als Ausweis von Wissenschaftsstandort, Berufsstatus und gesellschaftspolitischer Prävention*, Koblenz 2007, S. 21
- 17) Kirschbaum, Michael, Vom Isonzo bis an die Memel. Schulprogramme deutschsprachiger höherer Lehranstalten des 19. Jahrhunderts als landesgeschichtliche Quellengruppe in vergleichender Perspektive, in: *Blätter für deutsche Landesgeschichte* 144, 2008, S. 217.
- 18) Kochendörfer, Siegfried, Elisabeth Smolinski, Robert Schweitzer, *Katalog der Schulprogramm-sammlung der Stadtbibliothek Lübeck*, Lübeck 2000.
- 19) Kirschbaum, Vom Isonzo bis an die Memel, S. 216.
- 20) Kirschbaum, Vom Isonzo bis an die Memel, S. 222.
- 21) Jakob, Hans-Joachim, Schulprogramme im 19. Jahrhundert. Anatomie einer Publikationsform, in: Korte, Hermann, Ilonka Zimmer, Hans-Joachim Jakob (Hrsg.), »Die Wahl der Schriftsteller ist richtig zu leiten«, Frankfurt am Main/ Berlin/ Bern/ Bruxelles/ New York /Oxford/ Wein 2005, S.135.
- 22) Ibid, S.148ff.